「細江草」所収の良玄詠歌

中西健治

一

近世私家集の一として良玄の「弄璞集」「続弄璞集」がどのような内容であるのか等について、先に簡単な概要を発表したところ、後に藤田真一氏より良玄の和歌は「細江草」に見られることなどの御教示をいただき、再度これらをも含めて検討しなおすことにした。

「細江草」は上野洋三氏編『近世和歌撰集集成』（地下篇）に収められている。そこでまず、『日本古典文学大辞典』から、上野氏御執筆の「細江草」の項を引用し、その輪郭を捉えておくことから始めたい。

細江草（ほそえぐさ）　十巻三冊。和歌。羽山蘭子編。大串元善序。不深序。編者自跋。編集年次を確定する根拠が見出せないが、元禄年間（一六八八―一七〇四）中頃と推定される。【内容】元善序によれば、百竹軒なるものが遠江在住中に遠近の人々の歌を集めたものを、その妻蘭子が分類増補して、一三八一首の撰集となったという。作者は、編者周辺の人物も多いが、とりたてて地方的特色はない。集中の詞書によれば、庭田雅純・清水谷実業・岩倉具起・飛鳥井雅章・竹内惟庸・中院通茂・冷泉為景などの添削を受けた作品が多く、江戸時代前半期の堂上二条派の影響下にあるものである。なお採集の時代も地方も広いために、佐河田昌俊・日比正甫・季吟・湖春・

清水宗川・岡本宗好・山名玉山・契沖・葛岡宣慶など様々の人物が、作者としても、詞書の中にも登場するなど、興味深い。【伝本】内閣文庫蔵写本が唯一の伝本であるが、草稿としての跡をもとどめる。（五・四五六頁）

この記述によって、「細江草」が興味ある内容をもちながらも未だ十分には研究がなされていないことがわかるのであるが、上野氏はさらに別のところで、この「細江草」の文学史的位置付けについて、「大阪を中心とする堂上風の歌よみの作品を集めたものに、『難波捨草』（貞享五年跋）・『堀江草』（元禄三年奥）・『細江草』がある。いずれも写本として各一本が伝わるのみであるが、単に上方に限らず各地の大名旗本歌人の動向を伝えるものとしても貴重な材料を提供する。[2]」と述べて、今後の研究の指針を示されていることは有益である。本稿では、そのような今後の研究に俟つところの多い「細江草」に注目し、そこに採られている歌人のうちで比較的多く入集している良玄の和歌が、彼の私家集である「弄璞集」「続弄璞集」の中にほとんど見えているという事実について報告することを眼目とし、併せていくつかの問題にも触れてみることにする。

二

主たる結論を右に述べてしまったが、順序として、まず「細江草」入集の作者についての調査が必要であろうと考え、十五首以上採られている歌人とその巻別一覧（次頁参照）を次に示した。

この表によって、歌人良玄は「細江草」編者にとってかなり重く扱われている人物であったとみることができる。上野氏の解説を考え合わせるならば、編者にかなり近しい人物であった可能性もあると思われるのである。表1から、特に顕著な傾向を窺うことはできないものの、強いていうならば、入集歌の最も多い橘忠能は全巻にわたってまんべんなく採られているのに比べ、良玄は主として四季歌の方に偏っている。また、高橋尚俊・小野口正知・羽山氏女蘭

（表1）「細江草」歌人別収載歌数一覧　（数字は上から順に巻一～巻十）

人名	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	計
橘忠能	5	4	4	6	2	6	5	4	4	4	44
藤原信詮	3	4	4	3	3	4	1	3	2	6	33
本多重世	2	4	4	4	3	6	2	5	1	1	32
良玄法師	3	6	2	7	1	3	2	2	2	2	30
高橋尚俊	1	2	4	4	3	3	1	3	5	3	29
源宣慶	1	4	2	4	1	2	3	1	2	2	22
西山卿	3	1	3	0	2	2	0	0	4	3	18
小野口正知	1	2	2	2	1	1	0	1	4	4	18
大串元善	2	3	1	5	2	1	2	0	0	1	17
田中休可	1	2	3	1	2	3	2	1	0	0	16
蜂須賀正明	2	1	2	4	1	3	2	1	0	0	16
大沢重富妻	1	2	1	1	1	3	1	2	2	2	16
羽山氏女蘭子	1	1	0	0	1	1	1	0	4	7	16
関戸氏女常子	3	2	3	1	1	1	2	1	2	0	16
西尾茂村	1	2	2	3	1	2	1	2	1	2	15
鈴木氏女延子	1	2	1	2	1	2	1	1	0	2	15

子などが雑の部に多く採られているのに比べ、良玄歌は少ないことなどを指摘することはできよう。

三

本題に入ろう。その前に「弄璞集」「続弄璞集」について簡単に触れておかねばなるまい。

「弄璞集」「続弄璞集」とは、共に兵庫県立篠山鳳鳴高等学校の青山記念文庫に所蔵されている写本をさす。これらは共に上・下二冊ずつ、計四冊の写本、並びに「続弄璞集」と題する右肩脇に「四冊之外」、下に「滅後門弟子拾遺之」と付記されている写本一冊（以下、拾遺本という）の、合計五冊が漆塗りの桐箱に入って伝えられているものである。形態と歌数は次のとおりである。（数字は歌数を示す）

弄璞集（上）　春一四五・夏九〇・秋二九二・冬九二　計六一九首

弄璞集（下）　恋一九八・雑一二二・哀傷二四・述懐三三・懐旧四・祝九・神祇六・釈教六九・伊勢参宮私記（一六）　計四八一首

続弄璞集（上）　百首和歌（両度）・十首和歌（両度）・新撰和歌六帖による歌五二六　計七四五首

続弄璞集（下）　春九〇・夏一〇〇・秋六三・冬六三・恋七五・雑五五・釈教一三・懐旧二三・述懐一〇五・その他三三　計六二〇首

続弄璞集（拾遺本）　春七一・夏五一・秋七五・冬四五・恋一六四・雑四七・述懐七四・懐旧八・その他六五　計六〇〇首

拾遺本を除く四冊はいずれも同筆で、草稿本の形跡も一部あることなどから、良玄自筆の可能性もあり、良玄の自撰私家集と判断してもよさそうである。拾遺本であるとわざわざ断わっていることからしても、そう考えることは首肯できるように思われる。ともかくも右の五冊で総計三千六十五首は、あるいは良玄の中心的詠歌の集約ではなかっただろうか。そして、「細江草」には拾遺本を除く四冊から採られているのであるから、「細江草」編者の許で参酌された時期は良玄の生存期間と重なり、つまりは交際範疇の両人であったと推測することもできるのではないだろうか。

以下に、上段に「細江草」、下段に「弄璞集」「続弄璞集」の本文を示した。前者は『近世和歌撰集集成』に依り、その番号を付し、後者は巻と丁数とを示した。

初春の風といふ事を読侍る　良玄法師

10 和田の原八十嶋かけて出る日の光しつけき春の初かせ

軒梅　良玄法師

71 春風のふくにつけては板間あらみいとゝもりくる軒の梅か香

野遊　良玄法師

122 こん春の命もしらす思ふとちすみれさく野に今日もくらしつ

待花といふことをよみ侍る　良玄法師

140 桜花またしと思へはあやにくにまかふ斗の嶺のしら雲

惜花　良玄法師

215 あかてちる花のかたみそとはかりにきゆるはおしき嶺の白雲

帰鴈　良玄法師

231 なれかゆく北のおきなのことくさよかへらすとても春の鴈かね

初春風

わたのはら八十嶋かけていつる日のひかりしつけきはるのはつかせ　（弄・上・二オ）

簷梅

春風のふくにつけては板間あらみいとゝもりくる軒の梅か香　（続弄・上・一ウ）

夕野遊

こん春の命もしらす思ふとちすみれさく野に今日はくらしつ　（続弄・下・三ウ）

待花

桜花またしと思へはあやにくにまかふ斗の嶺のしら雲　（続弄・下・四オ）

惜花

あかてちる花のかたみそとはかりにきゆるはおしき嶺の白雲　（弄・上・八ウ）

（帰鴈）（十三首一連ノ歌）

なれかゆく北のおきなのことくさよかへらすとても春の鴈金　（弄・上・九オ）

雲雀　良玄法師

242 何と身を思ひあかりて夕雲雀もとの芝生にとをさかるらん

（苗代の哥よみ侍るに）（249・250・251ニツイテノ詞書）　良玄法師

250 苗代の水や心にまかすらん日数程よきしつか小山田

樵路つゝしを　良玄法師

256 妻木こる道さまたけの岩つゝし色を夕日の影にまかへて

余花　良玄法師

288 暮てゆく春のかたみやおく山のみとりに残る花の一えた

水鶏をよみける　良玄法師

409 柴の戸のさしもみしかき水鶏哉たゝかすとても明やすきよを

七夕橋といふことを　良玄法師

485 いつはりのなき世にかけしちかひとて空に絶せぬ

鶉」（三ウ）

なにと身を思ひあかりて夕ひはりもとの芝生にとをさかるらん　（続弄・下・四オ）

苗代

なはしろの水やこゝろにまかすらむ日かす程よきしつか小山田

樵路躑躅」（六ウ）

妻木こる道さまたけの岩つゝし色を夕日の影にまかへて　（続弄・下・七オ）

残花

暮てゆくはるのかたみやおく山のみとりにのこる花の一えた　（弄・上・一二オ）

水鶏

柴の戸のさしもみしかき水鶏かなたゝかすとても明やすきよを　（弄・上・一六ウ）

七夕橋

偽りのなき世にかけしちかひとて空にたえせぬか

かさゝきのはし

秋の夕くれといふ事をとまりにて百五十余首よみける哥のうちに　良玄法師

526 かりにたに人はとひこすはし鷹のと山の庵の秋の夕くれ

527 つらきにもうきにもあらすなとされはよにいひしらぬ秋の夕くれ

528 とにかくに身をははなれぬうき事も今一しほの秋の夕くれ

529 さして恋る人はなけれと天つ空雲のはたての秋の夕くれ

530 かきりなき思ひまされはおほかたのうきに数そふ秋の夕くれ

（鶉）（568・569ニツイテノ詞書）　良玄法師

569 うたの野のかりの此世をうらみてや葛の葉かくれ鶉なくらん

さゝきのはし　（続弄・下・一七ウ）

（秋夕）（長文ノ詞書アリ）

かりにたに人はとひこすはし鷹のと山の庵の秋の夕暮

つらきにもうきにもあらすなとされはよにいひしらぬ秋の夕暮

とにかくに身をははなれぬうきことも今一しほの秋の夕暮

さしてこふる人はなけれと天つ空雲のはたての秋の夕暮

かきりなき思ひよされはおほかたのうきにかすそふ秋の夕暮

（以上五首・弄・上・三〇ウ、但シ、「弄」デハ、526・527・528・530・別ノ一首・529ノ順デアル）

鶉

うたの野のかりの此世をうらみてや葛の葉かくれうつら鳴らん　（弄・上・二四ウ）

（九月尽の哥とて）（731・732・733ニツイテノ詞書）　良玄法師

733　行秋をおしむ涙やあすよりの袖にしくるゝはしめ成らん

和泉の吹居にて宿のあるし短冊もていてて何にてもかきつけよといふもさすかにて　良玄法師

814　友をなみ我世ふけゐの浦千鳥跡とゝむへき言のはもなし

この字をかしらにて寒月の心を人にかはりてよみ侍る　良玄法師

884　衣手に霜さゆる夜の月更て声すみのほる暁のかね

遠州浜松に住けるとしの暮　良玄法師

909　定なきいのち也けり老の波ことしもこえぬさよの中山

昼恋　良玄法師

995　草の葉もひるまはなとかなかるらん風にしられぬ

九月盡

行秋をおしむ涙やあすよりの袖にしくるゝはしめなるらん　（弄・上・二九ウ）

和泉の吹居にて宿のあるし短尺もて出て何にても書つけてよといふもさすかにて

友をなみ我世ふけゐの浦。跡（千鳥）とゝむへき言のはもなし　（続弄・下・二三ウ）

この字をかしらにて寒月の心を人にかはりて

衣手に霜さゆるよの月更てこゑすみのほるあかつきの鐘　（続弄・下・二四オ）

遠州浜松にて

定なき命也けり老の波ことしもこえぬさよの中山　（続弄・下・二六ウ）

昼恋

草の葉もひるまはなとかなかるらむ風にしられぬ

袖の白露　　良玄法師
同し会席にて
命たにおのか物から恋しなていつまて人をつらし　1027
と思はん
恋哥おほくよみける時寄霧恋といへるこころを
よみ侍る
朝夕にかよふ心しへたてすは霧のまかきの幾重な　1038
りとも
（月次の会に寄水恋といふ題をとりて）（1056・1057ニツイテノ詞書）
むすひけん世々の契りはあさくとも影たに見えよ　1057
山の井の水
としのくれ人〳〵来りて哥催しけるに羇中歳暮
といふ題をとりて
あゆめ駒春さへちかきふる里の道の行てにとしそ　1194
くれぬる
（百竹軒か許より竹の絵に哥かきておこせよと
のそみけれはかきつけて遣しける）（1217～1223ニ

袖のしら露　　（弄・下・九ウ）
（恋命）（六首一連ノ歌）
命たにをのか物から恋しなていつまて人をつらし
と思はむ　　（続弄・下・三七オ）
（寄霧恋）（二首ノウチ前歌）
朝夕にかよふ心しへたてすは霧のまかきはいくへ
なりとも　　（続弄・下・三八ウ）
寄水恋
むすひけん世〻の契りはあさくとも影たにみえよ
山の井の水　　（弄・下・一二ウ）
（羇中歳暮）（二首ノウチ後歌）
あゆめ駒春さへちかきふるさとの道の行てにとし
そくれぬる　　（続弄・下・二七オ）

1221 ツイテノ詞書）　良玄法師

すくにして葉かへぬ竹を身におへはよのうきふしもあらしとそ思ふ

蟠竜院殿大坂より浜松にうつり給しは延宝七年霜月中比にや十二月はしめつかたやかて武江に参向有しをあくる二月十五日はかなく成てはいとなり給と聞てたに思ひのやむこともなけれは

1352 良玄法師

むさし野にきえし煙のゆかりそとおもへはかなし空のうき雲

華厳経の心にて春の釈教をよみ侍る　良玄法師

1361 わしの山高ねの花を雲とたに思はてかへる春のかね

該当歌ナシ

蟠龍院殿大坂より濱松にうつり給しは延寳七年霜月中比にや十二月始つかたやかて武江に参向有しをあくる二月十五日はかなく成てはいとなり給を聞てたに思ひのやむこともなけれは

むさし野にきえし烟のゆかりそとおもへはかなし空のうき雲　（続弄・下・四九オ）

華厳経

わしの山高ねの花を雲とたに思はてかへる春のかり金　（弄・下・三一ウ）

以上の対照表によって、「細江草」所収の良玄歌三十首のうち二十九首までが彼の私家集の中に見出されることから、「細江草」編者が「弄璞集」「続弄璞集」を何らかのかたちで参酌していることは確かなことといえよう。「細江草」1221は「弄璞集」「続弄璞集」には無いが、これは「百竹軒か許より竹の絵に哥かきておこせよとのそみけれは

かきつけて遣しける」との詞書をもつ七首連作のうちの一首であるから、おそらく百竹軒のところから「細江草」に入集したのではなかろうか。

右の共通歌の詞書を比較すると、例えば1352のように「細江草」の方がほとんどそのまま引き写す場合、「……を」「……といふことを」あるいは「……といふ事をよみ侍る」という語句を補足する場合、さらに「細江草」の方で新たに詞書を付加する場合などがあるが、これらはいずれも「細江草」の編纂方針に組み込まれたいささかの手直しとみてもよいものである。「細江草」に最も多く入集している橘忠能の歌について、忠能自身が編んだ「難波捨草」との共通歌における詞書は、「難波捨草」の方が全般的に詳細で、「細江草」はそれらに依拠して省略された詞書となっている。自分以外の歌の詞書については、縮約することはあっても、さほど大きな改変をすることは当然遠慮すべきことであった。

四

「細江草」と「弄璞集」「続弄璞集」との関係をみてきたのであるが、各々の歌集についての検討、とりわけ「細江草」についてはまだ準備がなされておらず、後日に譲りたい。ただ、「細江草」の中で筆者の目にとまった箇所が若干あるので、覚書風に記しておく。それは藤原宗俊、蜂須賀正明の歌が収められていることについてである。

藤原宗俊は慶長九年（一六〇四）十一月六日、江戸に生まれ、寛文二年（一六六二）に大坂城代に任ぜられる人物であるが、その後、延宝六年（一六七八）八月に遠州浜松城主となり、翌年二月十五日、七十六歳で死去、京都大徳寺中芳春院に葬られて蟠龍院殿と諡されていて、このことについて長々しい詞書が良玄によって記されているのである。藤原宗俊は青山家第十四代当主で、その宗俊の子孫が青山家をより隆盛に導いたのであり、現在、青山記念文庫

に襲蔵されている多くの書籍は宗俊とその後裔の蒐集によるところが大きい。なかんずく、宗俊のために筆写された「宮河歌合」や、宗俊の子である忠重が西行の歌風を慕ったことを偲んで筆写された「御裳濯河歌合」は、良玄の門弟と思しき良以によって書写されているのである。[3] このことから宗俊と良玄とは主従の関係にあったことが窺われ、この両者の歌が揃って「細江草」に収められていることは、おそらく浜松城主になったことを契機としてか、「細江草」編者との交際があったことを推測させるものである。「細江草」909の詞書に、「遠州浜松に住けるとしの暮良玄法師」とあり、「続弄璞集」（下）の奥書に「延宝辛酉暦五月下旬於遠州浜松城下書之　七十歳　良玄」とあることから、浜松の地にあって、城主宗俊、良玄、「細江草」編者たちの文芸的サロンの存在を想定することも、これまた自然なことではあるまいか。

一方、蜂須賀正明は、天正年間以降、青山氏の有力な陪臣となって代々家老職を務めた蜂須賀氏の出であり、[4] 宗俊の長男、忠雄の歌稿を集めて「焦桐和歌集」を編んだ人物でもある。実はこの人物こそ、「弄璞集」「続弄璞集」、拾遺本を加えた計五冊の写本を収める漆塗りの桐箱を寄進した当の本人なのである。上蓋の内側に「此集者僧南可所自詠也南可本隠棲於賀茂後遷屋于紫野改号良玄　蜂須加半蔵正明寄附此箱」と墨書されていることから、良玄をよく知り、「弄璞集」等の歌集やそれに関わる諸々のことについても、あるいは知悉していたのではないかと思われる人物である。「細江草」巻七の末尾二首に次のようにある。

良玄来りて歌催しける時恋命といふ題にて当座　　蜂須賀正明

1026　あふにかへんためしはよそのならひにて　つらきにまくる命とも哉

同し会席にて　　良玄法師

1027　命たにおのか物から恋しなて　いつまて人をつらしと思はん

「良玄来りて歌催しける時」とあることから、良玄が歌会の中心的人物となることがあり、その場を提供するにふさわしい親しい仲間の一人が蜂須賀正明であったと知れる。両人は同じ題で歌を詠み合う豊かな時を共有していたのであった。

五

「短歌」昭和六十三年八月号の特集は、山本健吉氏の追悼特集と並んで「近世和歌の世界」が組まれていて、編集後記には次のようにある。

和歌史の中で、江戸時代は、最もブランクとされている時代である。作品は無数に生み出されているのだが、後世に喧伝されるような歌が少なかったということなのであろうか。当時の短歌がどのような状況にあったかを探るべく、「特集・近世和歌の世界」を組んだ。

「無数に生み出された」歌集の一、「弄璞集」「続弄璞集」を取りあげ、「最もブランクとされている時代」の研究材料を提供し得るのではないかと思い、ささやかな報告をした。本書を仔細に検討すれば、まだまだ興味ある問題が発掘できそうに思われてならない。

注

（1）拙稿「青山記念文庫蔵弄璞集研究序説」（「兵庫国漢」第三十五号、平成元年三月）

（2）上野洋三氏「堂上と地下」（島津忠夫氏他著『和歌史　万葉から現代短歌まで』所収）一八七頁。

（3）拙稿「「御裳濯河歌合・宮河歌合・兼好家集」の写本について」（「平安文学研究」第79・80輯）

（4）中野卓郎氏「篠山藩家老、蜂須賀氏について」（「丹波史」第10号）

（付記）「弄璞集」は別に一冊本、二冊本があり、「良玄詠草」と題する写本のあることがわかっている。そのうち、一冊本は本稿で対象とした「弄璞集」上・下を合冊したもの、二冊本は同じく「続弄璞集」上・下に相当している。また、「良玄詠草」は外題に「良玄詠草百首」と直書するように、「続弄璞集」（上）の冒頭の百首詠歌（延宝五年六月二十五日から七月三日、同七月五日から七月十一日に詠まれた百首歌）をとり出して一冊としたものである。

なお、本稿脱稿後、上野洋三氏より、田中善信氏が、『初期俳諧の展開』所収「『隔蓂記』の連俳資料㈢—周令と南可—」の中で、周令と南可が同一人物とみられる可能性について論じられているとの御教示を得た。仮りに、良玄が南可、はたまた周令と称したことがあった人物ならば、内閣文庫や大阪市大の森文庫に蔵されている「秋夕和歌」が「弄璞集」中の和歌と重なるようであること、周令の五山僧としての活躍、季吟との交際等々、問題はさらに広がるにちがいない。これらを含め、別稿を予定している。

最後になったが、上野洋三氏、藤田真一氏の御学恩に感謝申しあげる次第である。